

研究の総括

1 今年度の研究から

研究主題「未来へつなぐ教科・領域の授業づくり」を掲げた取組も4年次を迎えた。今年度はこれまでの3年間の研究を基盤にしながら特に「学びの中で教科特有の見方・考え方を働かせながら、現実世界に対応した総合的な活用力の育成のために必要なことは何であるか。」と「学びのプロセスを子供たちが主体的に粘り強く取り組むために、教科・領域の世界に没入していく学びにおいて必要なものは何であるのか。」について探っていくことをテーマに研究を進めた。

「学びの中で教科特有の見方・考え方を働かせながら、現実世界に対応した総合的な活用力の育成のために必要なことは何であるか。」については、いくつかの教科・領域の研究の中で、共通のめあてとして研究が進められていた。現実世界に即したリアルな問題を設定し、子供たちが自分事としてモチベーションをもって問題を解決する過程で、各教科の見方・考え方を活用する場面を引き出して答えを導き出していく学びのプロセスである。導入段階での適切な問題づくりの研究であったり、問題解決の中で教科の見方・考え方を効果的に引き出していく手法の研究であったり、振り返りの活動でめざす資質・能力を身に付けさせていく方法の研究であったりと研究のアプローチは様々であったが、目指しているイメージは共有されていた。

また「学びのプロセスを子供たちが主体的に粘り強く取り組むために、教科・領域の世界に没入していく学びにおいて必要なものは何であるのか。」についてもいくつかの研究の中で探究された。教科・領域の世界に子供たちが没入するために、教材の魅力にどのように触れさせていくのが有効であるのかの研究であったり、学習活動を進める中で新たな考えを引き出す資料をどのタイミングでどのように提示するかで、子供たちをさらに教材に引き込んでいけるかの研究であったり、グループ学習をする中で子供たち同士の関わりの中から、この教科の学びの必要性に気付かせ、目的意識を高めて学びの質を上げていく研究であったりと、教科の世界に没入することを目指す方向性は多くの研究で扱われていた。

このように各教科・領域部の研究では、全体のテーマに沿って明確な目的意識をもって研究を進め、それぞれの研究が一定の成果を上げることができたと考えている。

しかし、一方で結果が当初想定していたものと違うものになった研究も見られた。これは、研究者の主観でまとめた結果ではなく、今年度目指した客観的なデータの裏付けを大切にした研究の結果であると考えられる。研究の結果を研究者が都合のよい解釈をして成果とする研究では、誰でも実践できる授業の本質的な姿は見えてこない。今年度はそういった研究があったことも成果であると考え。これにより研究は職員全体で共有し生かされるものになり、学校全体、さらには地域教育に還元できるものになると考えている。附属小学校の存在意義として、公立学校で作成される実践記録集ではなく、本校が地域の学校に生かされる実験的・先導的なモデル校である理由は、共同研究者である大学の先生方とともに学術的な裏付けのある研究紀要を作成しているからであると考え。

今年度の研究全体を総括するに当たって、そういった意味でも研究の質を上げていく視点で捉え直す必要がある。研究の目的に対して実践方法・検証方法などが妥当であったのかを振り返ったり、先行研究が生かされた研究であったのかを確認したり、検証方法の客観性が保証されていたのかなどについても詳細に検証したりして各研究を総括する必要がある。本校研究は大学附属小学校として、今後も地域の多くの先生方に信頼される研究をしていくことをめざしたい。

2 追跡アンケートから

(1) 追跡アンケート集計結果

本校研究発表大会（2020年10月31日）後、ご参会の方を対象に追跡アンケートを行った。集計結果を以下に挙げる。

令和2年度鳥取大学附属小学校研究発表大会に関する追跡アンケート集計結果

25/79・・・回収率32%

1 本校の研究発表大会において、自身の授業実践等で生かせるものがあったか。

A あった（25） B なかった（0）

2 生かせる部分をどうしているか。

A 既に生かしている（7） I 今後生かしていきたい（18）

3 どの内容が生かせるものであったか。（複数回答あり）

A 各教科・領域の公開授業【動画】（20）
教科・領域名（国語科1、算数科7、理科4、社会科2、生活科3、道徳科1、
外国語科5、図画工作科1、音楽科2、プログラミング教育6）

I 各教科・領域の研究授業案【文書】（10）

U 研究の概要【文書】（2）

E 本校の研究について【動画】（1）

4 今後、どのようなことに生かせそうか。（複数回答あり）

A 授業実践（22） I 教科・領域の理論構築（9）

U 学級経営（1） E 研究全般（6） O 指導案作成（2）

5 今後、附属小学校にどのようなことを期待するか。また、来年度の研究発表大会への要望。

・今回は、コロナ下でありながら、貴重な授業実践を多数見ることができました。どの授業も、何度も見直す中でとても工夫されていることがよく分かりました。普段は、一瞬で過ぎていく授業の様子を、じっくり参観し考えることができ、複数の授業参観をすることができました。県内外を問わず、参加しやすいことも大きなメリットだと感じました。

逆に、デメリットとしては、カメラで映ったことでは判断できないことです。教師と子供、子供と子供、子供と教材などその場のやり取りや子供のつぶやき・反応がどうしても分かりに

くいところがあります。完璧なものというのは、現在の状況ではないのですが、この度のような発表の仕方もありだと思いました。要望として、分科会がなかったことは残念でした。授業者はどのような意図で行ったのか、時間が経過すると、回答の内容がぼやけてしまう部分もあるからです。附属小として情報発信していくことは大変ですが、重要な責務だとも思っています。新たな発表の仕方について、今後検討していただけたらと期待しております。

- ・音楽の授業を見させていただきました。ICTの効果的な活用の仕方を学ぶことができ、鑑賞でも大いに役立つことがよく分かりました。このような実践を、先進校からまた学んでいきたいと思っています。子供たちに配布されていたワークシートなども拝見できると非常に有難いです。またどうぞ宜しくお願い致します。
- ・コロナ対応の面が一番大きいかとは思いますが、このようなオンラインの研究発表大会は気軽に、また無料で参加することができ、非常によかったです。コロナが収まり、通常の研究発表ができるようになって、このような取組を継続していただけるとありがたいです。ありがとうございました。
- ・コロナ禍の中でこのように学びの場を提供していただき感謝しかありません。今後も研究の成果を発信していただけたらと思います。
- ・動画が定点だったので、様子がよく分からなかった。子供の考え方のアップが欲しかった。
- ・来年度も、ぜひ外国語の授業を見せたいと思っています。
- ・本校でも1月に公開研究会を予定しており、動画配信での公開方法、大変参考になりました。今後も授業実践の公開を楽しみにしております。ありがとうございました。

(2) 追跡アンケート集計結果より

本年度は例年の郵送によるアンケートではなくオンラインで追跡アンケートを実施した。回収率に変化はなく、結果が早く集計できる点でも有効であった。例年通りに、本校の研究が自身の実践に生かせるものであったという意見を多くいただくことができた。しかし、研究発表大会がオンラインでの実施ということもあり、昨年度と単純に比較することはできないが、昨年度に比べると既に実践に生かしているという回答が減少していた。アンケートの実施が例年より早く研究発表の1か月後だったということも影響しているのかもしれない。アンケート結果を全般的にみると、おおむね好評で、改めて本校の教育研究に対して、大きな期待をいただいていることを実感した。今後、さらに実験的・先導的な教科・領域の学びを追究するという研究を進めていくとともに、地域のモデル校として情報発信を広く積極的に行っていく。

3 おわりに

来年度はGIGAスクール構想の実施に伴い一人一台のタブレット端末の環境が教室に整うことになる。教科の本質を考えながら、新たな学びのスタイルを創造していく時期がやってきていると思われる。教員はこれからやってくる未来を想像し、そのために必要な学力を身に付けるための授業をデザインすることが大切になる。それこそが「未来につなぐ授業」である。教科ごとに「何を理解しているのか」をベースにしながら、「何をできるようになるか」という資質・能力を育成するコンピテンシーベースの学力の重要性をとらえて、本校としてまた新たな研究テーマに向かって進んでいく必要があると考える。